こまちの車窓から

看護学部特任教授　下平唯子（2019.1.7）

「秋田こまちはオコメ、スーパーこまちは新幹線」と孫たちが囃し立てていた、そのこまちに乗って秋田への出稼ぎを始め、かれこれ5年が経とうとしている。最初にこまちに乗った時は本当にびっくり、座席シートカラーは、秋田こまちの穂が実った黄金色しかも穂の粒粒までが描かれているし、通路・ドアや窓の日除けにも実った稲穂の絵柄、まるで稲穂のトンネルの中に居る様な感覚だった。さらに、スーパーこまちの鼻先は男鹿半島のなまはげカラーを模していることから、車体の魔除け作用があるのかなと感心したり、ボディは阿仁鉱山の銅の色を表現していることから、秋田の発展の象徴なのかなと考えたりしながら通勤している。

そのスーパーこまちの大事な友は本である。1冊読み終えた後の手持無沙汰と時間のもったいなさに恐怖を感じ常に2・3冊は私のお供をしてくれている。しかし、その本を片手に、見るのは車窓の眺めである。大宮から盛岡までは超特急の320キロなので、四季折々の色合いが飛ぶように過ぎ去り、盛岡から急行並みになると四季の香りや沿線の農作業の様子や枝豆栽培の様子まで目に入るようになり、このスピード感は私のようなスローペース仕様にはぴったり感がある。

このスローな走りの中で発見したのは、何と北の国から飛来してきた白鳥の親子である。何しろ、動物園でしか生の白鳥を見たことがない私にとって、毎年の晩秋の白鳥探しは胸が躍る楽しみである。東京始発に乗車するとちょうど仙台を過ぎたあたりから、湖沼から編隊を組んで田んぼに食探しに飛来してくるのを目の当たりにすることが出来る。スロー区間になると、餌をついばんだお辞儀で胸が泥だらけになったちょっと興ざめな白鳥と出会うことになる。体の小さいコハクチョウは敵の襲撃から身をかわすため、より過酷な状況にある北極圏（ツンドラ地帯）まで生活の範囲を広げていることを知ると、こんな小さな生き物までが生活の知恵いっぱいで生きていることを考えると何だか敵対心むき出しの人間の愚かさが見えてくるようである。

ところで、今年はこの秋田の地で白鳥のひなならず、がん看護専門看護師のひなが3羽も誕生したのである。飛べよ3羽のひなよ、秋田の大空へ、いや日本の空へ！白鳥になるまで見守ることが楽しみである。